

---

# 憎しみの果てに

石和 涼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

憎しみの果てに

### 【Nコード】

N5600C

### 【作者名】

石和 涼

### 【あらすじ】

常軌を逸した嫌がらせに困惑する姉妹。一家に起こった悲劇は二年前から始まった。

## 第一章 プロローグ

### 第一章

#### ピンポーン

朝の十時、世間ではブランチタイムだ。  
沙世は髪を掻き上げながら、玄関に近寄った。  
ドアスコープを覗くと五十センチ大のダンボール箱を抱えた、宅配便のドライバーの姿が映った。  
慌ててドアチエーンを外し、ドアを開ける。

二十代後半かと思われる青年は爽やかな笑顔と共に

「貴嶋沙世さんですか？お届け物です。こちらにサインを…」

と、荷物と共にボールペンを寄越してきた。

「はい」

何食わぬ顔で、手慣れた手つきで、さらさらとボールペンを走らせる。

「ご苦勞様です」

そう言いながら、伝票とボールペンを青年に渡す。

「ありがとうございます」

また、ニコリと爽やかに微笑み、青年はいそいそと走ってマンションの廊下を走って行った。

誰かしら。まあ、大体予想はつくけどね

送り主を確認すると、沙世はうんざりしたような表情を露骨に浮かべる。きっと今頃、妹の美穂の所にも同じような箱が届いているはずだ。

開封もせず、玄関のすみっこにダンボールを置くと、早々にリビングに引っ込む沙世であった。

二

また届いたよ。きっとお姉ちゃんの所にも届いたろうなあ。

美穂もまた、中身を知っている様な顔をしている。

沙世と同じ様に開封もせず、コードレスフォンを手に取ると、押し慣れた番号をプッシュした。

3

プルルルル

待ち構えた様にワンコールで繋がると、相手が出様に話始めた。

「ちよつと、お姉ちゃんにも届いた？もう！何なのよあの人！私らのストーリーカーなんじゃないの？」

「まあまあ、落ち着きなさいよ美穂。ここで怒ったってどうしようもないでしょう？」

どうやら相手は先程の姉の沙世の様だ。

感情的に喋りまくる美穂に反して、沙世は冷静に美穂を宥める。

「いい？感情的になるのもわかるけど、今関係を拗らせたら、父さんに申し訳ないでしょう」

「でも……」

返す言葉が見つからず、黙る美穂。

「揃える材料費も送料も全部あちら持ちなんだからいいじゃない。今のまま言っても、あちらの好意と言う事で終わらせられるのは目に見えているわ」

「それはそうだけど……」

「いいわね。開封しないで捨てなさい。どうせロクな物じゃないんだから」

「わかった。でもそろそろ限界。取りあえず、今回『も』黙っているわ」

そう言つと、お互い別れの言葉もなく電話を切った。

三

沙世はバスタブに湯を張ると、ザブンと音を立てて風呂に沈んだ。沙世は透き通る様に真っ白な手を組み、腕を真っ直ぐに伸ばすと大きな伸びをした。

この所、仕事をひつつめに詰め込んだので、久しぶりのオフになったのだ。

いつも以上に爽やかな朝だったのに、今朝の届け物で一気に気分は落ち込んだ。

あー止め止め！折角の休日を台無しにされたくないわ。アレは捨てるんだから、気にしない気にしない！

勢いよく立ち上がると、シャワーを掛け、風呂場を後にした。

## 第一章 プロローグ（後書き）

初めての作品です。評価・感想など、是非お願いします。

## 第二章 仁美

### 第二章

—

二年前の初秋。まだまだ残暑も厳しい頃だった。

幼い頃に母親を亡くし、今まで男手一つで姉妹を育て上げた父親が再婚を決めた。

母を亡くして十七年が経っていた。

自分達を育てる為に人生を投げ、再婚もせずに頑張った父。

二人共成人していた事もあり、反対の声なんてあがりっこなかった。

父に、『再婚相手を紹介する』との名目で、海辺に建つ高層ホテルの最上階レストランに招待された。

ここはデートスポットとして、何度も取り上げられた有名店で、なかなか予約も取れないと言うのに、それから察して父親が相当張り切っているのが手に取る様に伺えた。

十九時。

待ち合わせ丁度に姉妹はレストランに入る。

父と、まだ見ぬ婚約者は昼間デートを楽しんでいた。

案内されたテーブルの先には、既に、父親達の姿があった。

「こちらが、仁美さんだよ。仁美さん。娘の沙世と美穂です。二人共あいさつしなさい」

いくらか緊張した様子で、いつもより若干強張りながら紹介した。

「長女の沙世です」

「次女的美穂です」

「小林仁美です。よろしくね」

緊張した二人とは違い、ふんわりとした笑顔を浮かべ、仁美は頭を下げる。

印象はおっとりお嬢様だった。父親の再婚相手だ、四十は越えているだろうに、あの年代の一種独特の妙にケバケバしい、若作りをした化粧ではない。

むしろ、清潔感溢れる上品なメイクに、肩までのセミロングの髪を綺麗にセットしている。

白と黒で薔薇の模様が描かれたワンピースドレスは、仁美によく似合っていた。

中年太りなのか、ややふっくらした印象だが、それが妙に女をエロチックにしていた。

食事の最中も、些細な話をコロコロと笑い、若い二人に話を合わせてくれ、姉妹は仁美にとっても好感を持った。

「父さん。私達、再婚に賛成よ。父さんの選んだ人だから、最初から反対するつもりもなかったけれど、応援するわ」

自宅のリビングで朝食を取る父親に沙世は言った。

「そうか。ありがとうな。それより、昨日何かまずい事してなかったか？緊張しすぎて半分覚えてないんだ」

新聞で顔を隠し、照れた様に笑う父親は、初恋をした少年の様にも見えた。

「大丈夫だよ！それとね、もう一つ話があるんだ。ね！お姉ちゃん」  
美穂が沙世の顔を覗き込む。

意を決した様に沙世が切り出した。

「実はね…」

「ん、なんだ？」

父親が新聞から顔を上げる。

「私達ね、独立しようと思うの。私も美穂も仕事は安定してきたし、丁度いい機会かな…と思って…」

そこまで言うと、美穂が口を挟んだ。

「父さんも仁美さんと新婚さんしたいでしょ？」

父親はまんざらでもなさそうな顔をしている。

「お前達はそれでいいのか？もう二人共一人前なんだ。自分で決めた事ならば父さんは反対しないよ」

そう言うと、父親は少し寂しそうな顔をした。

それから話はトントン拍子に進み、ひと月後には二人共新居へと移っていた。

二人がいなくなり、来週には仁美が越して来る。東の間のガラんとした貴嶋家で、父は何かを振り返る様に眺めた。

もう独立する様な年になったんだなあ。あれから十七年か……。なんだかあつという間だな。すまないなあ英子。僕は再婚させてもらうよ。許してくれ

亡くなった妻に許しを請うと、リビングボードに飾ってあった写真をしまった。

日曜日、仁美は旅行鞆四つ分の荷物でやって来た。

持ってきた物は、服と化粧品だけだった。それも、父親と交際が始まってから購入した物ばかりだった。これが仁美の全ての荷物だ。

「他に必要な物は、あなたとの思い出だけにしたいの」  
そう言つて白い歯を覗かせた。

#### 四

父親と仁美が籍を入れたのは、その年の、赤い紅葉も枯れ落ちた十一月の終わりだった。

世の中は冬に向け支度を始め、せっかちなデパートではクリスマスの準備に忙しく動いていた。

囁かな結婚パーティーの為に姉妹は貴嶋家を訪れた。

たった数カ月なのに、見慣れた我が家は全く違う表情を見せていた。あんなに綺麗に手入れをされていた庭木は抜かれ、青々とした芝生も掘り返されていた。

美穂は庭の隅に目をやると、姉を呼び止めた。

「お姉ちゃん。ジョンのお墓もぐちゃぐちゃだよ。」

ジョンは貴嶋家で飼われていた雄の柴犬で、二人だけでは寂しかりうと父親が知人から貰ってきた犬だった。

人懐っこい犬で、貴嶋家の三番目のアイドルだった。

五年前に、何者かに毒を盛った餌を食べさせられ、死んでしまった。結局犯人は捕まらず、泣き寝入りをしたのだった。

玄関を開け、また愕然とした。

以前の面影が殆ど無いのだ。

玄関脇の靴箱、フロアマットから壁紙まで、全く違うのだ。

ダイニングに行っても、母との少ない思い出のダイニングテーブルもリビングソファも何もかも違う。

溜まらず、美穂が口を開いた。

「父さんどうして！？母さんとの思い出の物が何もなくなっちゃったじゃない！テーブルは？リビングボードは？母さんの写真は？それに、ジョンのお墓だって…」

「美穂ちゃん、沙世ちゃんごめんなさいね。私が何も知らずに興奮する美穂の言葉を遮り、仁美が土下座した。」

「仁美さん、何があったかわからないけど顔を上げて下さい」

沙世は仁美に顔を上げさせ、話を聞くと、思い出の品とは知らずに新調してしまったのだと言う。

庭も、春になったら家庭菜園にするつもりで掘り返し、知らずにお

墓を潰してしまったのだ。

「二人共すまなかった。僕がちゃんと説明しなかったのが悪かったんだ。仁美に悪気は無かったんだ。わかってくれるね」

その日は、とてもパーティーなんてできる雰囲気ではなく、また後日と言う事にして、興奮する美穂を連れて帰った。

あの家は、同じ貴嶋家でありながら、全く違う家になってしまった。もう、気の落ち着く実家ではなくなってしまった。

約束の『後日』は二年経った今でも実現していない。

### 第三章 はじまり

#### 第三章

—

沙世は短大を卒業すると、在学中に取得した技能を使い、プロの代筆屋として独立した。

まあ、独立と言っても、企業から委託された物を在宅でこなしているの、立派な事務所なんて物は構えていない。代筆屋とは結婚式の案内状や招待状、熨斗の宛名書きがメインの仕事だ。

一方美穂は建築関係の専門学校を出ると、中堅の建設会社に入社し、インテリアコーディネーターとして着実にスキルアップしている。

姉妹は独立したと言っても、実家から車で十分くらいの所で、イメージするならば、実家とお互いのマンションが正三角形になっている。

二人は離れたと言っても、しょっちゅう、一緒に買い物や食事に行った。

再婚したとて、父親とも同じで、休みの日にはランチに出たりしていた。

沙世も美穂も、思春期にありがちな父親嫌いにはならず、父として時に母になり友人になってくれた父親が大好きだった。

しかし、それは仁美は癩に触った。再婚してからと言うもの、時折癩癩を起こし

「私とどっちが大切なの!？」  
と、激昂するのだった。

二

「あ、もしもし父さん?私だけど、今度の日曜暇?  
何度目かの呼び出し音の後、父親が出た。

「あ…ああ。またかけるよ」  
そう言っていると、ぷつりと電話を切ってしまった。

あゝあ。映画に誘おうと思ったのに…。美穂でも誘おうかな  
映画のチケットをカウンターに置くと、財布を握り、玄関k向かっ  
た。

コンビニに着くとお目当ての電球を手に取り、清算を済ませると帰  
路についた。

帰路と言っても、マンションの一階部分が店舗になっていて、その  
一角のコンビニなので目と鼻の先だ。

エントランスを入ると、ポストを確認した。

沙世の住むマンションは、ポストと留守時に荷物を受け取れるロッ  
カーがエントランスに設置されている。

ポストにはDMの山と、それとは明らかに違う白色封筒が入ってい  
た。

切手も無ければ、送り主の名前もなかった。  
宛名にはワープロで打たれた『貴嶋沙世様』と言う紙が貼り付けら  
れていた。

状況から察するに、ポストに直接投函されたようだ。



部屋にはコーヒー豆のいい香りが充満していった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5600c/>

---

憎しみの果てに

2010年12月24日14時05分発行